

紀南教会瓦版

発行所
紀南教会瓦版
編集委員会
和歌山県田辺市
下屋敷町80
TEL/FAX
0739-25-1191

天国で又会いましょう

三月三日早朝、榎本禮二兄が天国に帰られたことを聞きました。僅か三週間前にお見舞いに伺ったばかりでした。

てきました。禮二さんは私のどんな気持ちで分かって、そう答えたのだらうと、帰りの車中で思いました。

私にとって、禮二さんは神さまから遣わされた人、と感じた人でした。レモン宣教師と同居をしていた頃、禮二さんは作業所の帰りによく寄ってくれました。不自由な体で、片足を引かずりながら、危なっかしい格好で歩いてきてくれたものです。禮二さんが来るのは、私がいつも夕飯の準備をしている忙しい時間帯でした。夜は学習塾をしていましたから、私にはと

病床の禮二さんは、意識はしっかりしていましたが、レモン先生のご時も、他の話しも殆ど覚えていない状態でした。でも、何度何度でも、教会の皆様によく！有り難う！と口にしました。私はその姿に只々涙が止まらず、「泣いてばかりで、ごめんね！」と言つと、「気持ち分かります」と優しい言葉が返つ

てきました。そんなことが続いていたら、私も神さまにつづきました。「どうして、こんな忙しい時間に禮二さんは来るんでしょ！もつと別の時間に来てくれたらいいのに！」本当に酷い喧嘩です。その時、ふとこんな声が聞こえてきたように感じました。「あなたは何と言つことを言っているんだ！あなたはどこか間違っていますか？不自由な足で、わざわざ寄ってきてくれる人に、そんな気持ちを持つなんて、何と悲しいことだ！」と。私は自分の姿を恥

ずかしく思い、それを教え直してくれた。禮二さんは神さまからのお使いなんだ！と

と強く思わされたものでした。長い人生の旅路、禮二さんは不自由な体を抱え、晩年は生まれ育った故郷も離れなければならない、訪ねてくれる人も殆どいない、ただ一人の長い長い闘病生活でした。禮二さんの人生は、この世では決して恵まれたといえるものではなく、悲しいこと、寂しいこと、辛いこと、苦しいことの多い人生だった気がします。でも、イエスさまと出会い、最後まで感謝の心を持ち続け、誰にもつづやくことなく、誰をも呪うことなく、ひたすら天を仰ぎながら、神さまのもとに帰ったことでした。とても安らかな顔だったと、身内の方から伺いました。

う。私もそうありたいものです。禮二さん、ありがとう！又、天国で会いましょう！



一焼けぼっくに火が点いた

「自分にとって音楽とは何なのだろう...」と、フト考えることがある。物心がつく頃には心地よい音楽が私の周りにあったような遠い記憶がある。私は六人兄弟の末っ子、十四才上の長姉の語によれば、女学生の頃よく私を膝に抱っこしてレコードを聴いていたらしい。

曲のリズムに合わせるように、小さな体を動かすのを見て「オヤオヤと思った」と言う。

小学一年生になつた頃だろうか？夏休み等に帰省した姉達が椅子を丸く並べて座り、よく静かにレコードを聴いていた。当時のレコードは、大きくて扱いにくいSP盤で、シャーシャーという雑音と共に回転が速いので一枚がすぐ終わってしまい何枚も入った重いアルバムが何冊か並べられていた。それから間もなくLP盤などに親しんできたが、針を再三変えつつ皆が和だやかに音楽を楽しんでいる雰囲気は幼いながら私は何となく好きだった。

最近人前で引く機会が与えられた。長年の練習不足と感性の鈍りで練習に取りかかるのに勇気が要ったが、二ヶ月ほど続けていく内に少しだけ音が出てきて、忘れていた感覚が少し戻り、弾いているのがとても楽しくなってきた。表現したいイメージと実際のギャップの大きさに疲れたが、何もかも忘れて自分自身になれる爽快感、自分と向き合える大切なひと刻を全身で実感していることに自分でも驚いた。これを機に「騒がしいドラ、やかましいシンバル」にならぬよう、焼けぼっくに点きかけた火を絶やさぬよう少しずつでも自分と向き合っていけたらと願っています。

人は人を裁きうるか

紀南キリスト教会牧師 上山 耕司

丁度一年前、昨年五月二

日から、私達は、人が人を裁くことが出来るのか、という重い、深刻な問題に直面させられるケースが生じた。それは裁判員制度が始

まったからだ。いつ、誰が選ばれるか、わからない。もし、選ばれたとき、一体これをどう受け止めたらいのだからか。人が人を裁く「裁判員」となることと信仰はどのように関わるのか。この機会にこのことを考えてみたい。人が犯す、犯罪(悪)はその罪を指摘され、正しく裁かれなければならぬ。これは真理である。しかし、そこには二つの問題が生じてくる。

一つは人間の限界の問題だ。人間は犯罪の全てを正確に知り、正当かつ完全な裁きをすることは出来ない。だから、冤罪や不当な

判決も起こる。それは裁く人自身の限界、罪汚れの問題だ。そのことをしっかりと自覚しなければならぬ。一昨年だったか、現職の裁判官がストーリーカー行為をしたなどと報道された。エーツ裁判官が...。さらに、その裁判官が、かつてストーリーカー事件を裁いていたことがあったそうだが、全く信じられないような話だが、これはこの裁判官だけの問題ではなく、全ての人間の問題だ。誰もが、持つてくる弱さ、罪深さの問題だ。ローマ信徒への手紙二：一四「だから、すべて人を裁く者よ、弁解の

余地はない。あなたは、他人を裁きながら、実は自分自身を罪に定めている。あなたも人を裁いて、同じことをしているからです。神はこのようなことを行う者を正しくお裁きになると、わたしたちは知っています。このようなことをする者を裁きながら、自分でも同じことをしている者よ、あなたは、神の裁きを逃れられらるると思つてはいけません。神の憐れみがある。神の愛と寛容であり、神の一方的な恵みによるのである。

とあるように、自分の問題として捉えない限り、問題解決の糸口は見つからない。しかし、多くの人が思い違いをしている。自分を義とし、傲慢になり、上から人を裁いてしまふのだ。その人は神の前に、自分が裁かれなければならない罪人であることに気付いていない。それに気付かせるために、神の恵みによって、自分の姿を知らされた者が、裁く者としてではなく、心底同じ弱さ(罪)を持つ者として、彼が犯した罪を自分のこととして真摯に受け止め、彼の更正にとって何が、またどうすることが一番良

いことなのかを真剣に考え、誠実に取り組む覚悟があるなら、信仰者として、また一市民としての義務(権利)として裁判員を受けても良いのでは、と私は思っている。しかし、フィリピ三：一六に「いざれにせよ、わたしたちは到達したところに基づいて進むべきです。」とあるように、一人一人が現時点の自分の信仰、信念において、選択すべきことである、と思つ

に馴れ親しんだ大好きなもの、に過ぎなかったと思う。そんなノボホンと育った田舎の井の中の蛙がピアノ科に進み、毎日勉強と練習に追われる中で音楽の持つ深い魅力に気付かせられていったのかも知れない。

一日八・九時間程弾いてもまだ弾きたいと思う時もあり、逆にピアノに触れるのが怖いと思う時もあった。

素晴らしい演奏に魂まで揺り動かされるような、涙が溢れ出てくるような感動を覚えると共に、無きに等しい自分の無力さに何の為に弾いているのだろうか...と、その無意味さに悩んだ刻もある。

次号二七号は八月二九日発行の予定です。

